

始



8  
532

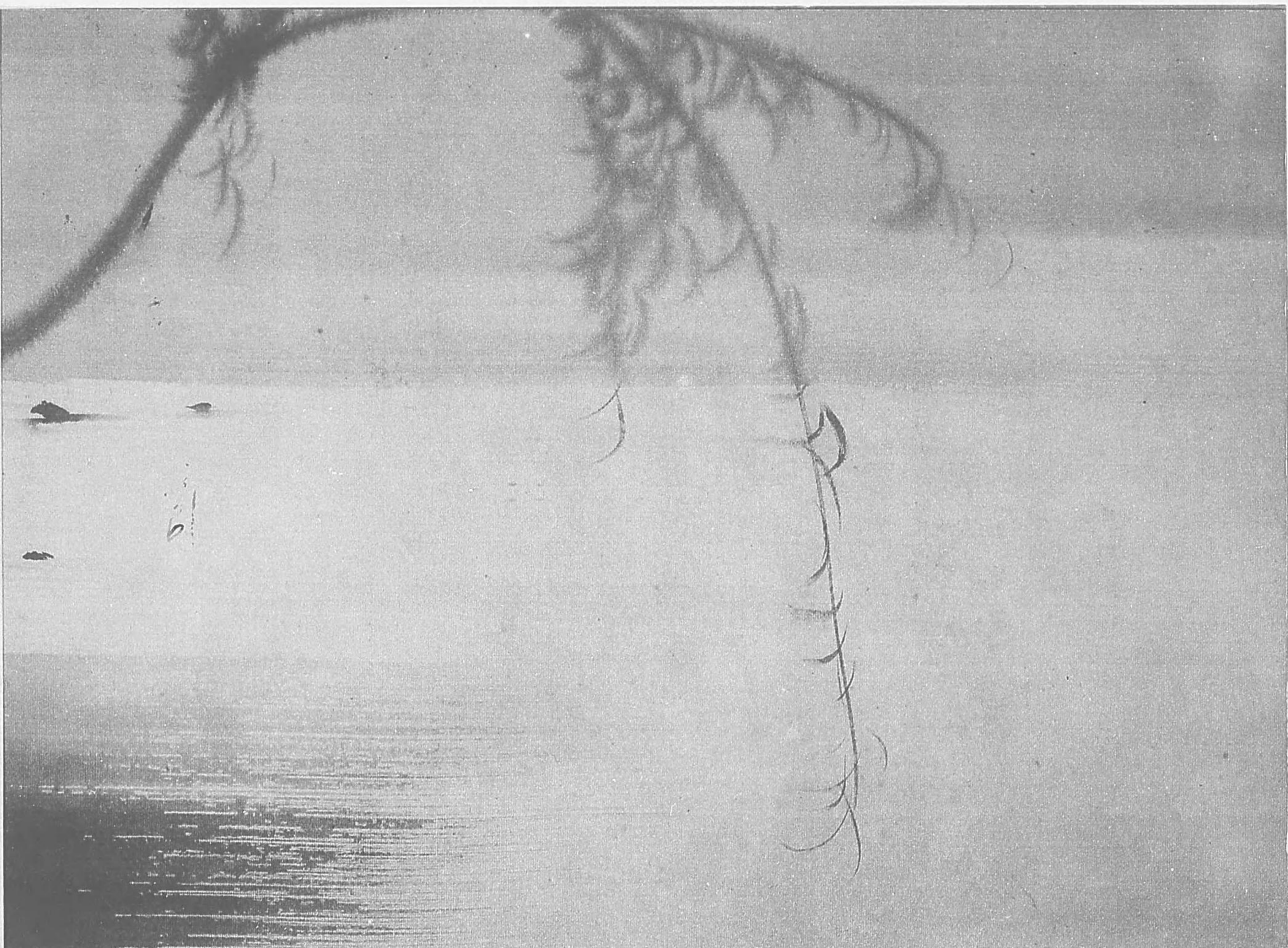
毎ひ乃

心へはと

奈良

附正の巻





まことアハシ奥のてし  
賦謝以平亦斜半前のみ  
とけしはを歸アの聖業  
並半官より遊歴の賦へ



の八音調の一がれと云  
蓋にア其輪堂の奈夏體  
未だ火炎の歸とちる時  
異時尚ほ開基とじしれ  
天平觀覽八平の御簞盤

書辭巽吉

唐招提寺

天平勝寶八年に唐僧鑑  
眞和尚が開基せしより  
未だ火災に罹らざる伽  
藍にて其講堂は奈良朝  
の八省院の一なりと云



近年官より修覆を加へ  
られしが、總ての建築  
規模は千有餘年前のま  
まにていと奥ゆかし



# 西大寺

稱徳帝僧常騰に勅して

此寺を創建せしめ給ふ

佛像は勿論寶物數多あ



る中に唐土傳來の青磁

赤繪等の茶碗形の大鉢

あり昔は毎歲正月此器

に濃茶を點じて薦む客

は上下着用にて之を服

す稱して西大寺の茶盛

といひしとぞ



般若寺重重塔

大塔宮護真親王笠置城  
没落の後當寺に忍びて  
おはしけるを賊黨按察  
法眼好毒聞き出し軍兵  
を率ゐて攻め寄せけれ  
ば宮は大般若經の唐櫃  
の中に隠れて其危難を  
脱れ給ひし事太平記に  
見ゆ其唐櫃今なほ此所  
に珍藏せり





法隆寺全景



舊名を班鳩寺といふ建初以來  
毫も其舊形を改めず我國未曾  
有の名刹なり古代の工藝を參  
考し歴史上の證據とすべき珍  
寶奇品今に存在して人の目を  
驚かす帝國無二の舊跡たり

### 法隆寺三經院

上宮太子の天下に仁慈恩恵を  
興へ給ひしは特佛教を弘通あ  
りしのみならず美術巧藝の諸  
技を擴張し我朝の文物これよ  
り盛になれり宜なるかな嗟し  
て聖徳と稱へ奉ること其名跡  
たる當院を拜して誰か感を起  
さざらんや





法隆寺表門

名にしおふ

のりのさかりな

聞くからに

いよ、尊き



班鳩のてら



大門に

舍利と降りくる

蔵かな



法隆寺五重塔

天に聳ゆる五層塔其塔内に

數知れず白木の塔を藏めたり

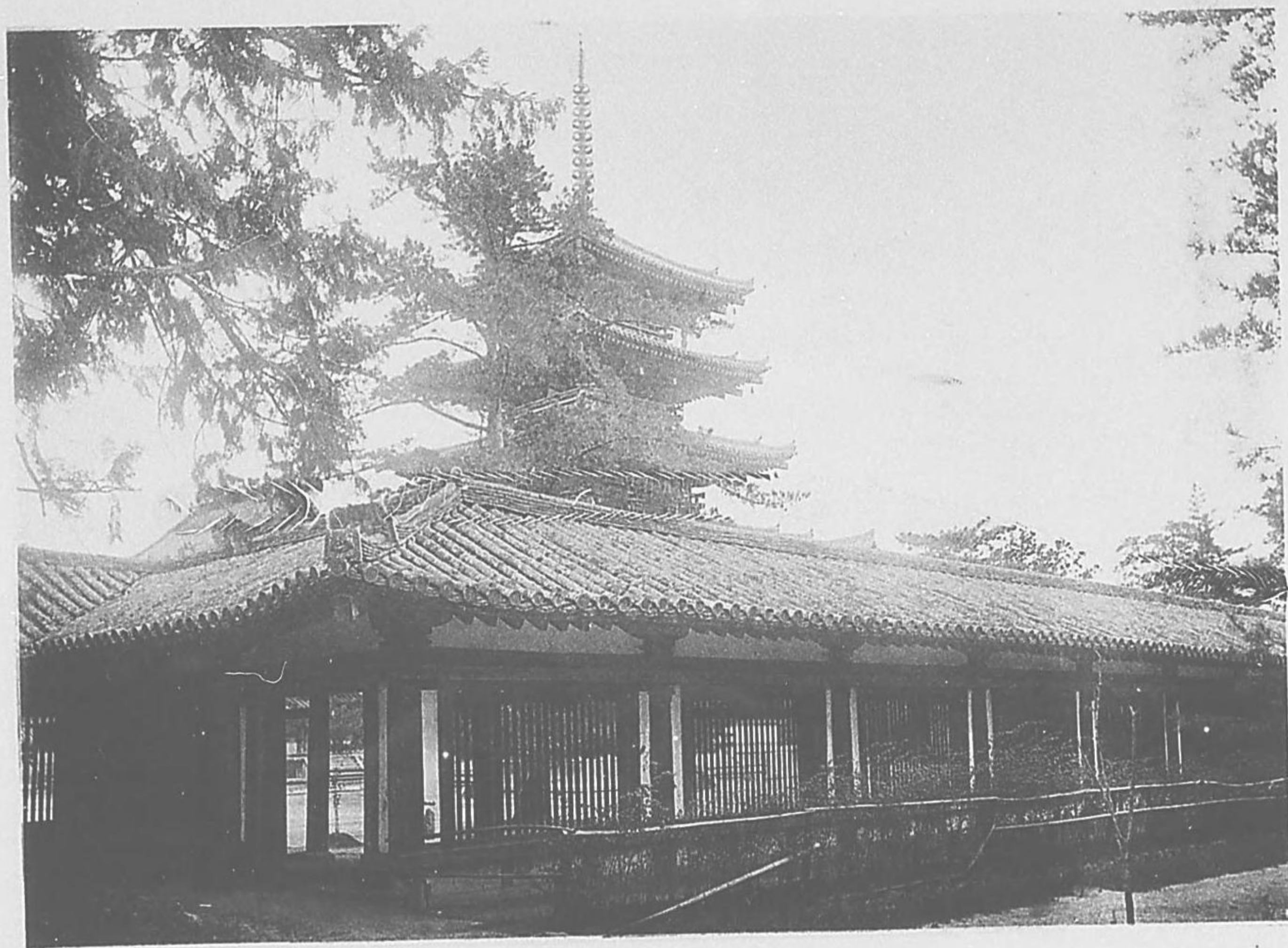
こは他の殿内にもありさかや

之を俗に百萬塔といふ

蕘かけて

佛汚すな

雀の子



法華寺

圓絨初出水規蓋已迎風

色迷青鳥度陰密戲魚通

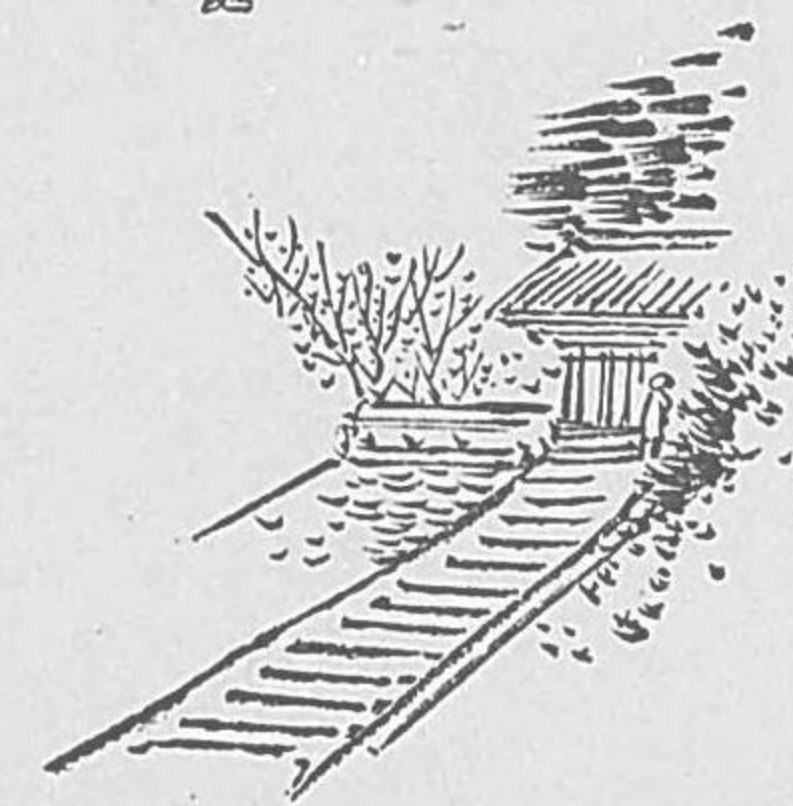
裁衣偏覺爽酌酒乍如空

向曉珠搖落時濁玉盤中

蓮の香や

けし犬受る

寺の庭



貴  
光  
寺



一名菅原寺といふ靈龜元  
年行基の創建する所なり  
聖武帝當時に行幸あり  
し時本尊の阿彌陀佛光明  
を發ちしより貴光寺の號  
を賜ひしとぞ天平二十一  
年行基は當時の東南院に  
て寂を示せり



龍田川

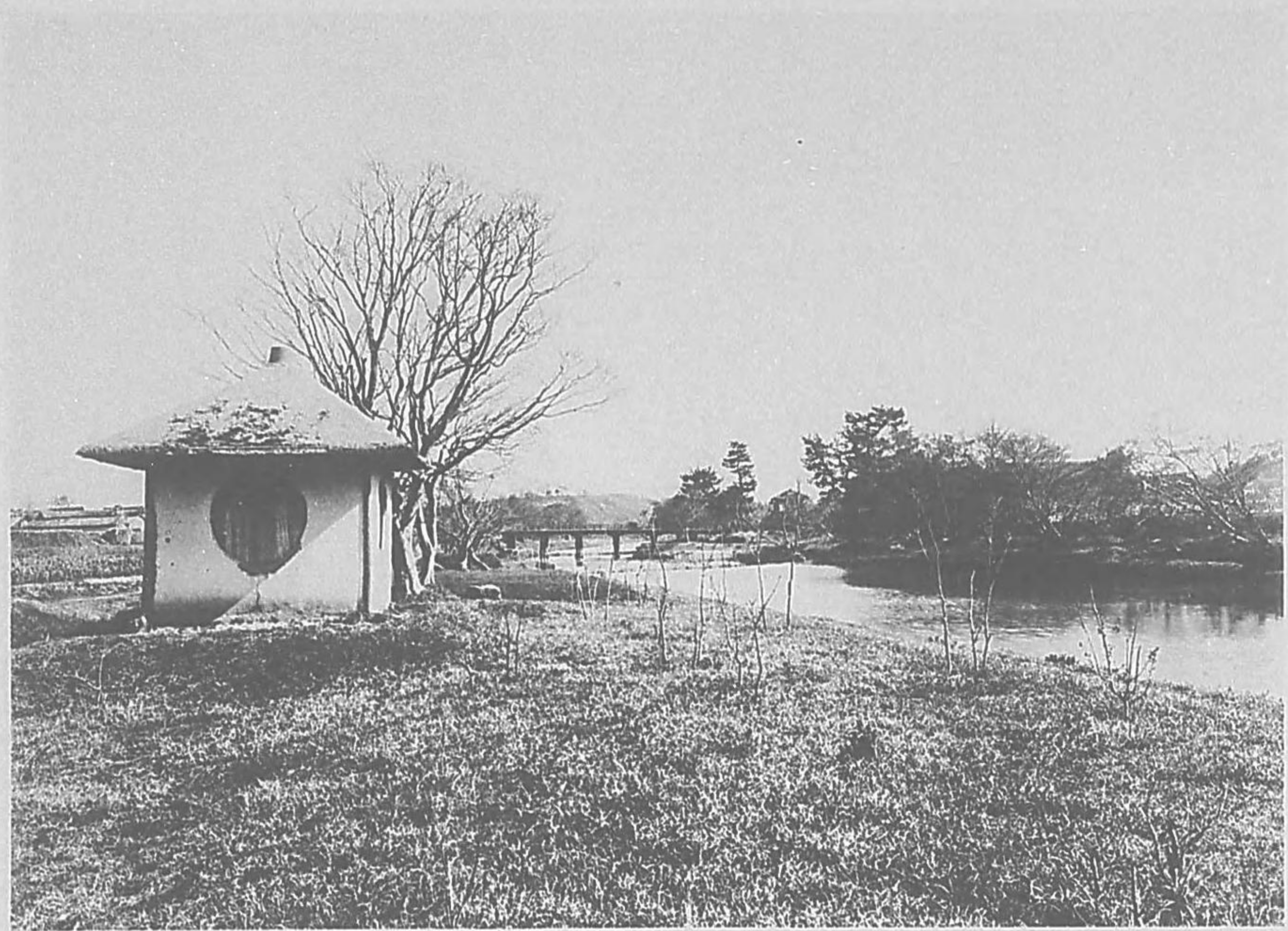
立田河紅葉亂而流留女里渡者錦中也  
絶奈武 讀人不知

龍田川紅葉流る神南備の  
三室の山に時雨降るらし

人丸



ちはやぶる神代も聞かず  
立田川から紅に水くゝるこは  
業平



垂仁帝御陵

菅原伏見陵土俗蓬萊山と稱す  
帝の聖徳數多なる中にも皇女  
倭姫をして

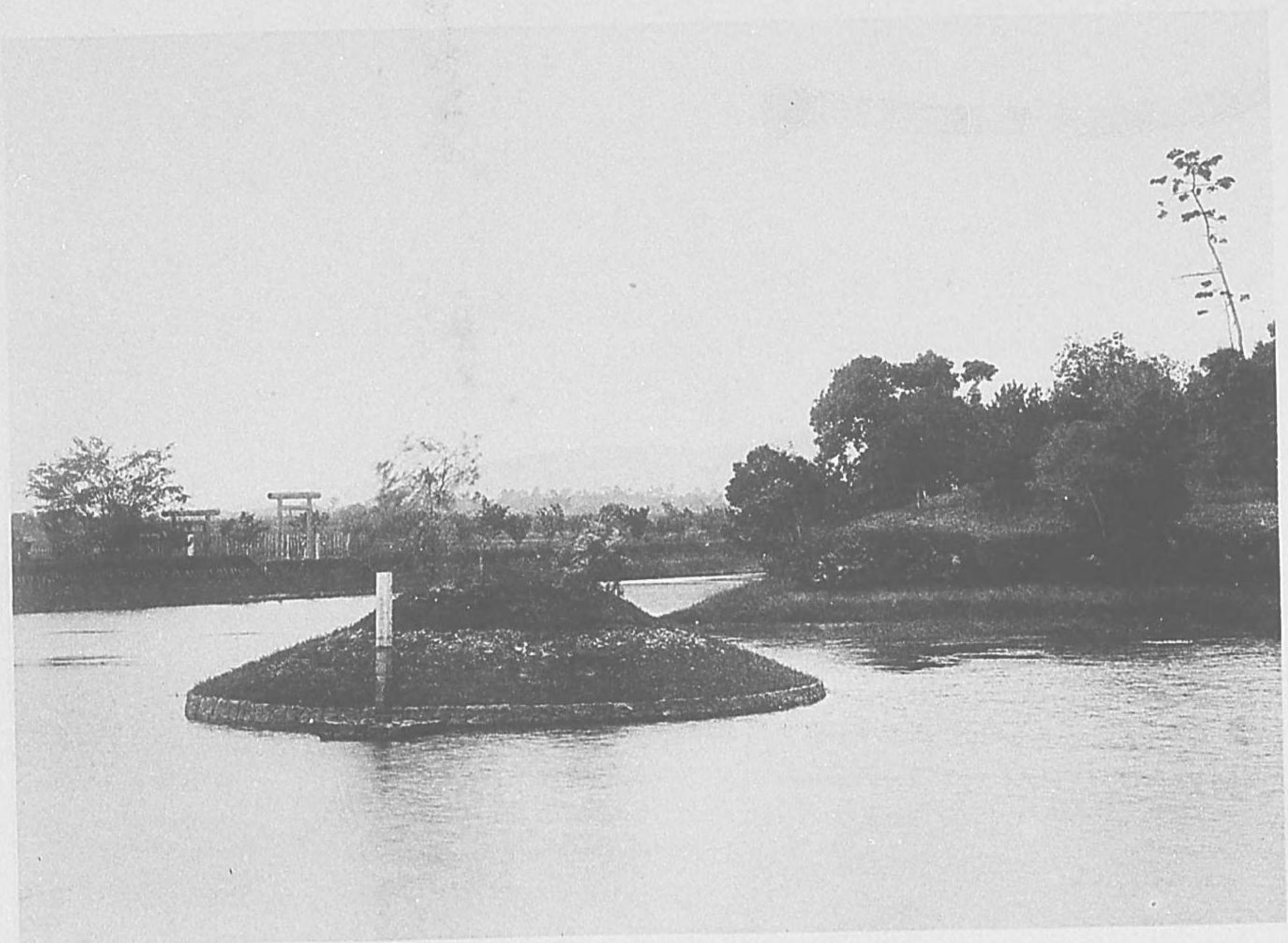


伊勢神宮を奉祀せしめ

給ひしと殉死を禁じて

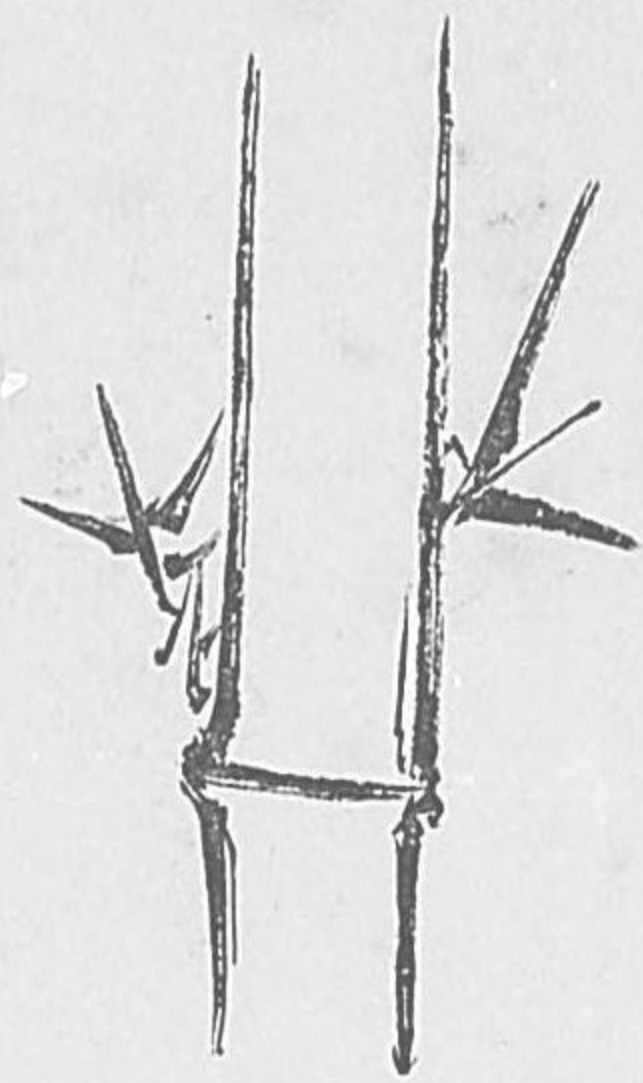
土物をもて之に代へしめ

給ひしとは殊更に尊くこそ

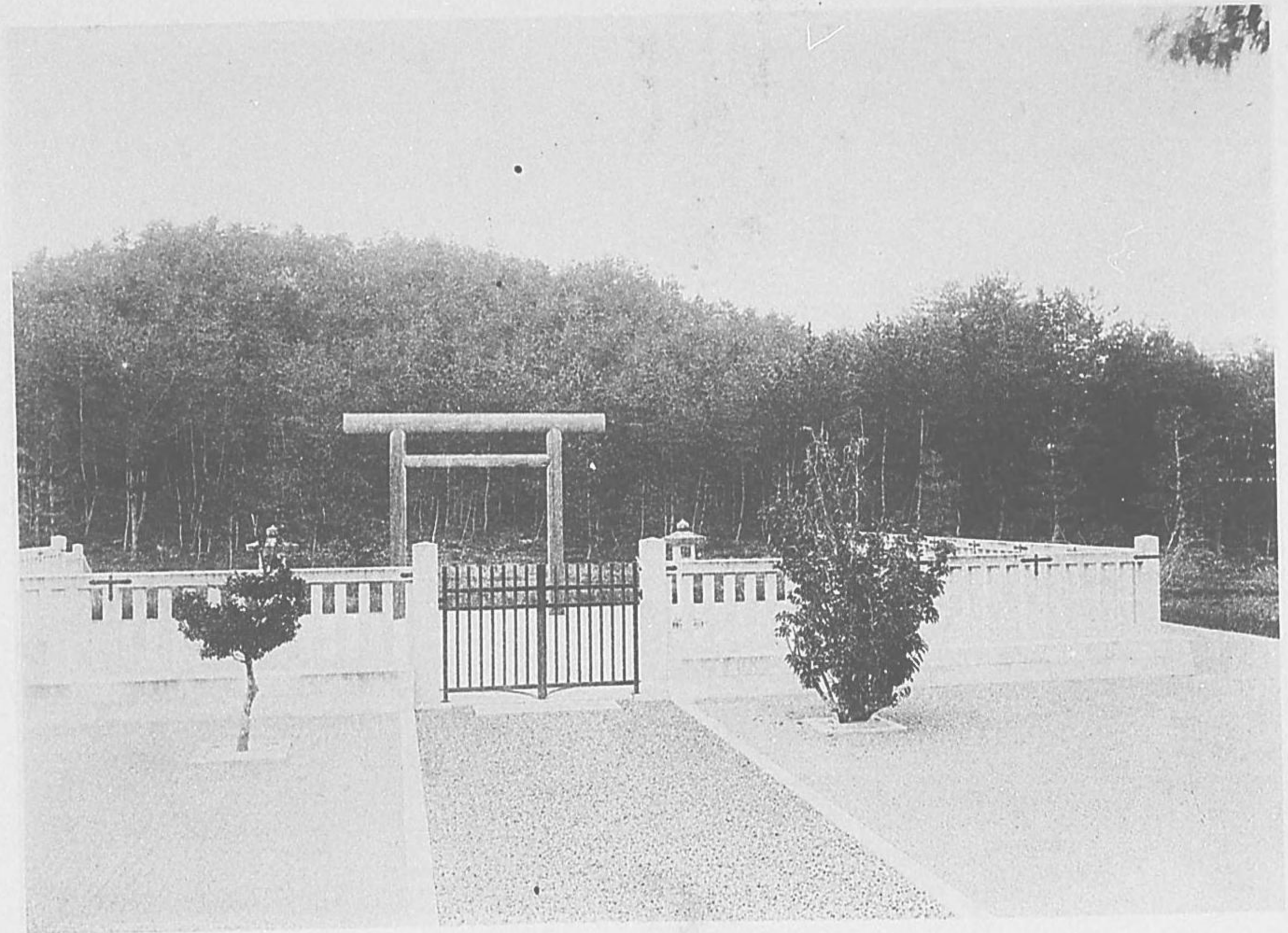


神功皇后御陵

舟師を率ゐて三韓を征服し  
給ひし御稜威は長くも勇ま  
し此御陵を拜して誰か奉仰  
の念を起さざる者あらん



秋風に虎臥す  
草も靡きけり



27/9/31

明治卅四年九月一日印刷

(旅の家土産第三十七號)

明治卅四年九月十日發行

(非賣品)

神戸市北長狹通五丁目四十六番地  
光村利澤方寄留

發行兼印刷者 八木富次

神戸市北長狹通五丁目四十六番地

發行所 光村寫真部

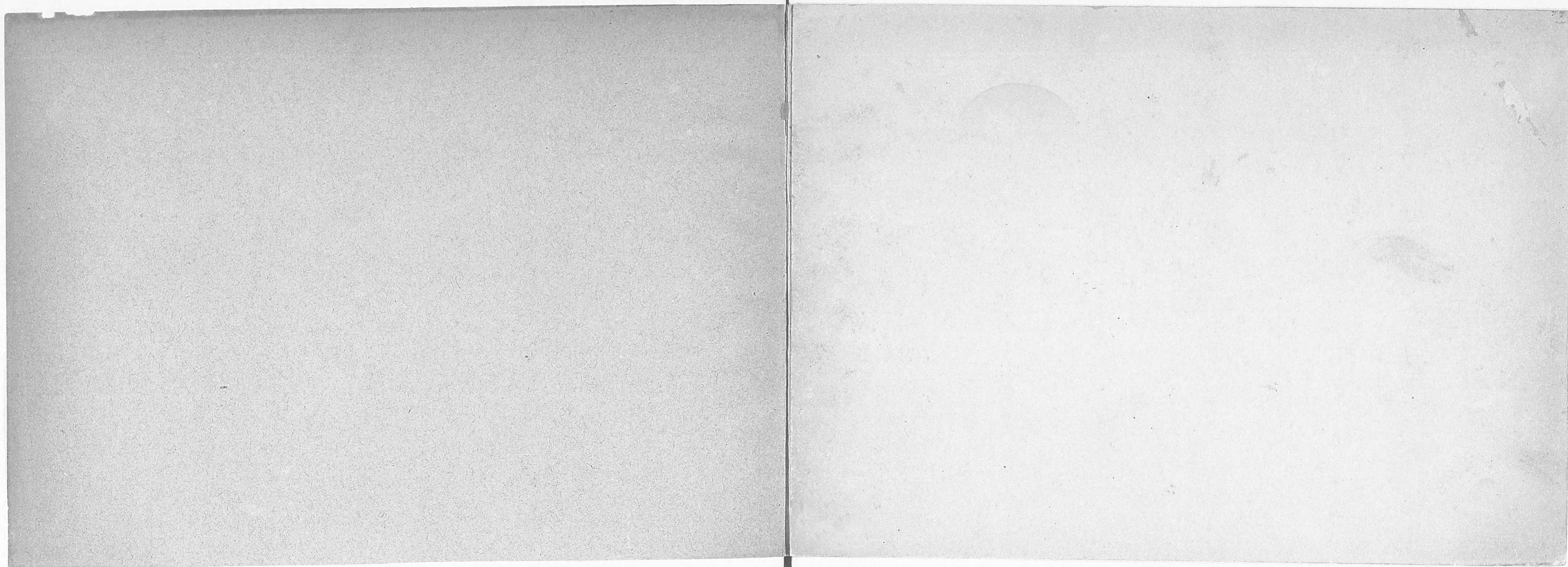
神戸市北長狹通五丁目四十六番地

印刷所 光村寫真製版部



8  
332





8  
222

終

